

令和 2 年 6 月 17 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K20932

研究課題名(和文) 同性婚の社会学 親密な関係性を全体社会に位置づける現代的プロジェクトの研究

研究課題名(英文) Sociology of Same-Sex Marriage: A study on how Intimacy is embedded in contemporary Japanese Society

研究代表者

森山 至貴 (MORIYAMA, Noritaka)

早稲田大学・文学学院・准教授

研究者番号：50745510

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は大きく分けて3点にまとめられる。(A)同性婚や同性カップルのパートナーシップの問題が、カップルを形成する同性愛者以外のセクシュアルマイノリティのおかれた状況をかえって抑圧する可能性があること、(B)クィア理論の分野で用いられている「新しいホモノーマティヴィティ」概念が同性婚の問題に適用可能であるが、現在の日本の同性カップルをめぐる状況が必ずしも新しいホモノーマティヴィティ概念に完全に合致するものではないことを示したこと、(C)セクシュアルマイノリティの間の不均衡は「家族」という観点から読み解けると示したこと、である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究においては、同性婚や同性カップルのパートナーシップの問題が、カップルを形成する同性愛者以外のセクシュアルマイノリティのおかれた状況をかえって抑圧する可能性を明らかにした。

また、COVID-19の流行という予想外のできごとにより、セクシュアルマイノリティの間の不均衡が「家族」という観点から読み解けることが明らかになった。その意味で、同性婚をめぐる問題は、セクシュアルマイノリティに関するノの中の不平等の問題全般に直接的に連関するものである。この点は、セクシュアルマイノリティへの差別を減じる社会的施策に対して、一定のインプリケーションを与えるものと考えられる。

研究成果の概要(英文)：The results of this study are divided into three points. (A) the issue of same-sex marriage and same-sex partnership has the potential to suppress the situation of the minority who is not homosexual and who does not form a couple; (B) the concept of "new homonormativity" used in the field of queer theory is applicable to the issue of same-sex marriage, but the current situation of same-sex couples in Japan is not completely consistent with the concept; and (C) the imbalance between sexual minorities can be read from the perspective of "Family".

研究分野：社会学

キーワード：同性婚 パートナーシップ 差別 クィア理論

1. 研究開始当初の背景

2000年代以降の日本における親密な関係性をめぐる社会問題は、日本社会が持つ標準的な「家族」のあり方から逸脱するよう見えるさまざまな関係性をめぐって生じた。とりわけ、セクシュアルマイノリティの形成するさまざまな関係の実態が明らかになるにつれて、親密な関係性の多様性と、それを十分に踏まえていない法制度、社会規範の問題性が明らかになってきている。

2. 研究の目的

そこで本研究では、まさに2000年代以降の日本、および世界において親密な関係性をめぐる議論の中心となっている同性婚を題材とし、親密な関係性の現代的変容の実相を探った。その際、既存の社会制度を所与のものとし、それに完全に包摂されることを目指す運動(のみ)ではなく、むしろどのような形で国家や社会と同性同士のパートナーシップを連携させることが望ましいか、といったより繊細な規範的問いについても考察することを目的とした。

具体的には、同性婚をめぐる社会運動の歴史、法制度、倫理的議論などを横断的に分析することを作業課題としつつ、親密な関係性の多様性とその社会的配置について現状を明らかにし、よりよい社会構想の材料とすることを企図した。

3. 研究の方法

研究の初期には、(1)同性婚に関する個別具体的なニーズや権利の集積を、どのように取捨選択し制度にするかについての繊細な議論をおこなうため、諸外国の制度の差異を精査し、また多様なセクシュアルマイノリティの間の不平等を生まないためにも、どんな順序で制度を積み上げていくのがよいかを検討した。その中で、(2)同性婚に関する議論がクィア・スタディーズの全体像に対してどのような関係をとるのかを検討するため、クィア・スタディーズの全体像をその歴史的経緯に着目して把握する作業をおこなった。

研究の中期には、それまでの研究で焦点として浮上してきた(3)同性婚とネオリベリズムの関係を、「新しいホモノーマティヴィティ」というクィア理論の主要概念と結びつけて検討した。またこの検討をきっかけに、(4)クィア理論の実践上の含意を探るべく、諸理論の把握を試みた。

研究の後期には、(5)「男性学」「障害学」「性暴力」「メディアと差別」など、同性婚を含むジェンダー・セクシュアリティにまつわる隣接諸領域の議論の検討をふまえ、本研究のまとめの段階に入った。学内での役職者に就任したため、最終段階において研究は若干停滞したが、研究期間の最後にCOVID-19が流行し、日本国内でもCOVID-19対策の要としての「家族」についての議論が活発になったため、(6)社会的弱者とノの家族の関係性について考察をおこない、主にWeb上の記事という形で(=アウトリーチ活動の一環として)発表した。

4. 研究成果

研究成果は大きく3つのカテゴリにわけられる。

(1)書籍

おもに上記の3-(2)「クィア・スタディーズの全体像の、その歴史的経緯に着目した把握」に関する研究成果をまとめた『LGBTを読みとく クィア・スタディーズ入門』を上梓した。セクシュアルマイノリティを「LGBT」と同一視する視座の不十分さを指摘し、ゲイ解放運動、HIV/AIDSへの取り組みなどの歴史的転換点を経る中で、クィア・スタディーズが現在の形をとるようになった経緯を整理した。

また、3-(5)「隣接諸領域の議論の検討」に関して、とりわけ差別に着目した形で書籍を執筆し、現在第一稿が完成し、改稿中である。具体的には、『LGBTを読みとく』の中で記述した、「良心」が引き起こす差別の問題性に着目し、「性暴力」や「障害」といったトピックに関する実践の中でいかにこの差別が引き起こされ、いかにこの差別を解除できるかについて考察・検討した書籍となる予定である。

本研究の中心テーマに関係する点として、いずれの書籍においても、同性婚や同性カップルのパートナーシップの制度が、カップルを形成する同性愛者以外のセクシュアルマイノリティのおかれた状況をかえって抑圧する可能性を、重要な知見として記述している。同性婚は、既存の異性婚システムへ同性カップルが包摂されることで、セクシュアルマイノリティ全体の社会的承認に関する正の効果を持つと考えられているが、実際にはむしろ、多様なセクシュアルマイノリティのあいだに社会的地位に関する格差を生む可能性がある。したがって、同性カップルの社会的包摂の施策として、同性婚以外の選択肢をも考える必要性を本研究は主張することになった。

た。

(2)論文

3-(3)「新しいホモノーマティヴィティ概念」、3-(5)「隣接諸領域の議論の検討」の観点を中心に(投稿)論文を作成し、各学会誌などに掲載した。

リサ・ドゥガンの「新しいホモノーマティヴィティ」概念は、セクシュアルマイノリティとネオリベラリズムの結びつきを示す、2000年代以降のクィア・スタディーズにおける最重要概念の一つである。この概念の有用性を確かめるため、本研究はまず、セクシュアルマイノリティとネオリベラリズムの関係性について検討した。結果、ネオリベラリズムという言葉の多義性を反映する形で、本来区別すべき事象が区別されずに「セクシュアルマイノリティとネオリベラリズムの結びつき」の実際の例とされてしまう問題が明らかになった。

そこで本研究では、この点に注意しながら、「新しいホモノーマティヴィティ」の事例として同性婚を捉えることができるか検討した。日本社会における可視性の高いセクシュアルマイノリティ(高所得層の男性同性愛者など)は新しいホモノーマティヴィティ概念の適用が可能であるが、現在の日本の同性カップルをめぐる状況を総体として捉えた場合、日常生活上のニーズゆえ同性婚を求める場合も多く、必ずしも新しいホモノーマティヴィティ概念に完全に合致するものとして、同性婚を求める社会運動を単に否定的に捉えてはならないことが明らかになった。

本研究においては、セクシュアルマイノリティに対するハラスメントについても隣接諸領域の議論と捉え、重点的におこなった。研究期間内における本務校におけるハラスメント対策への参与、および国際社会における MeToo 運動のインパクトにより、当初の研究計画ではほとんど想定していなかったこのサブテーマに関する研究が進展した。とりわけ、「笑えない下ネタ」が、その「笑えなさ」を折り込みながら性暴力として流通する様子について記述を与えたことが、このサブテーマに関する研究知見の中で、もっとも社会還元性の高いものだと考えられる。

そのほか 3-(2)「クィア・スタディーズの全体像の、その歴史的経緯に着目した把握」に関連して、ジュディス・バトラーの「パフォーマティヴィティ概念」についても理論的検討をおこなった。結果、階層をなして包含関係にある3つの含意がこの言葉には込められているが、そのいずれを重視するかによって、この語を用いた議論に矛盾を引き起こしてしまう可能性が明らかになった。

(3)Web 上記事を主とするアウトリーチ活動

いずれも、セクシュアルマイノリティのおかれている状況の解説が重点となっているが、COVID-19 の流行という予想外のできごとにより、セクシュアルマイノリティの間の不均衡が「家族」という観点から読み解けることが明らかになった。

COVID-19 に対する国内の感染対策には、「家族」をその要として位置づけるものが多い。しかしそこで想定されている家族像は、性別役割分業と異性愛規範に支えられたものであり、同性カップル、単身者、友人同士のルームシェア、寮での生活などはほとんど想定されていない。他方、性別役割分業と異性愛規範にのっとった家族でも、その成員がさまざまな事情で「別居」している場合も、感染対策からはこぼれ落ちやすくなる。ただし、セクシュアルマイノリティのカップルの中でも、「新しいホモノーマティヴィティ」の事例となるような場合には、むしろ感染リスクの低い生活を維持できることもわかった。

その意味で、同性婚をめぐる問題は、セクシュアルマイノリティに関する / の中の不平等の問題全般に直接的に連関するものであると、多くの読者=市民に示し、本研究の知見を還元することができた。

本研究によって得られた成果の国内外における位置づけとインパクトは以下の通りである。

クィア・スタディーズやその理論的著作、とりわけ本研究にとって重要な「新しいホモノーマティヴィティ」概念について、その日本社会における適用可能性を検討した結果、いくつかの点を除いて適用可能であり、かつよりいっそうこれらの概念に適合するものへと日本社会が変質していることが明らかになった。

他方、HIV/AIDS とゲイアイデンティティの創出 / 自己批判の関係については、とくに日米で対比的に考えるべきである(大きな差異がある)ことが確認できた。しかしこの差異については、単純な図式化を避けるためにより繊細な検討が必要だと思われる。

本研究に後続すべき作業として、大きく分けて次の3つの点を挙げることができる。

(1)クィア・スタディーズの歴史的経緯に着目して整理し著作として発表したことが、結果としてクィア・スタディーズの知見の社会への還元として有効であることが明らかになった。他方、クィア・スタディーズの重要な著作多くが英語で書かれているが、そのほとんどが日本語に翻訳されていない。そこでクィア理論にターゲットを絞って、その推移や特徴を日本語で整理し紹介する作業が必要だと思われる。

(2)MeToo ムーブメントなどの影響を受け、セクシュアルマイノリティに関しても、包摂やダイバーシティの方策以前に、ハラスメントや差別というシビアな暴力についての考察の必要性があらためて確認されているように思われる。本研究の中では、差別をめぐる原理論的な考察の作業をおこなったが、その知見を性の多様性というトピックに限定した形でいま一度検討していく必要があると思われる。

(3)同性婚をめぐる議論は、関係形成権や共同生活上のニーズの観点から社会運動や学術的議論がなされてきた。しかし、COVID-19の問題を経由し、これらの観点とは少し位相の異なる、性の多様性と「住まう」こと(とくに、複数人で住居を一にすること)の観点から考えることが重要だと明らかになった。情緒的な関係と法制度上の世帯ユニット、双方の拠点としての「住居」のリアリティに着目した研究が今後必要となると思われる。この観点からの研究は、本研究自体の当初の目的でもあった、「親密な関係性の現代的変容の実相」を探るための重要な作業課題となることが予想される。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 47(2)
2. 論文標題 ないことにされる、でもあってほしくない 「ゲイの男性性」をめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 117-126
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森山至貴	4. 巻 47(3)
2. 論文標題 複数の置換可能性ーパフォーマティヴィティをめぐって	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 145-153
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森山至貴	4. 巻 47(6)
2. 論文標題 新しいホモノーマティヴィティ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 180-184
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 森山至貴	4. 巻 8
2. 論文標題 空中から鳩を取り出すーキア・ペダゴジーに関するノート	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ジェンダー研究21	6. 最初と最後の頁 49-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 7
2. 論文標題 男二人暮らし、はじめました。	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 支援	6. 最初と最後の頁 123-129
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 45(20)
2. 論文標題 居場所がしんどい、現場がこわい	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 238-248
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 46(6)
2. 論文標題 「新しさ」の畏にはまらないために	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 62-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 30
2. 論文標題 セクシュアリティとネオリベラリズム	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 解放社会学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 7
2. 論文標題 文字通りの声	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 ジェンダー研究21	6. 最初と最後の頁 36-68
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 1031
2. 論文標題 笑っても地獄、笑わなくても地獄	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 早稲田文学	6. 最初と最後の頁 74-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森山至貴	4. 巻 9
2. 論文標題 書評『ロシアのLGBT』	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ジェンダー研究21	6. 最初と最後の頁 71-75
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森山至貴
2. 発表標題 同性婚・同性パートナーシップの国際比較 制度設計 / 批判のための試み
3. 学会等名 関東社会学会第63回大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 森山至貴
2. 発表標題 セクシュアル・マイノリティの社会運動
3. 学会等名 第9回差別論研究会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 森山至貴
2. 発表標題 セクシュアルマイノリティとネオリベラリズム
3. 学会等名 第31回日本解放社会学会大会
4. 発表年 2015年

1. 発表者名 森山至貴
2. 発表標題 同性パートナーシップ制度化の倫理的検討 どの順番で、どこから変えるのが望ましいのか？
3. 学会等名 第88回日本社会学会
4. 発表年 2015年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 瀬地山 角	4. 発行年 2017年
2. 出版社 勁草書房	5. 総ページ数 328
3. 書名 ジェンダーとセクシュアリティで見る東アジア	

1. 著者名 森山至貴	4. 発行年 2017年
2. 出版社 筑摩書房	5. 総ページ数 237
3. 書名 LGBTを読みとく クィア・スタディーズ入門	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----